

PHD

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

LETTER

129

2015. 7

PHD 運動とは 1962 年よりネパール、東南アジアを中心に医療活動に従事した岩村昇医師の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの 10 パーセントをささげて、平和 (Peace) と健康 (Health) を担う人づくり (Human Development) をすすめ、共に生きる社会をめざし、1981 年からはじまりました。

発行：公益財団法人 PHD 協会
住所：〒650-0003 神戸市中央区山本通 4 丁目 2-12
山手タワーズ 601
TEL：078-414-7750 FAX：078-414-7611
E-mail：info@phd-kobe.org
URL：http://www.phd-kobe.org
郵便振替口座：公益財団法人 PHD 協会 01110-6-29688

特集 ネパール大地震



4.25 ネパール大地震発生。
「なにかできることをしたい」という思いから、
神戸元町で PHD 協会初の街頭募金を実施。
たった 3 時間で約 43 万円ものご支援をいただく。
神戸の人たちの被災者を思いやる気持ちに感謝。

▼▼ 皆様からのご支援が、たくさんの笑顔になりました！ ▼▼



いただいた募金は現地での救援活動に。
ネパールと神戸、震災を通じた新たな絆。
これから復興の道を一緒に歩んで行きたい。

特集 ネパール大地震



4月25日、ネパールでM7.8という大地震が発生しました。ネパール国内での死者が8,710名、うち女性4,808名、男性3,902名(6月6日時点)、周辺国での死者が134名、負傷者は2万人を超え、家屋の全壊50万棟以上、損壊は約27万棟、学校の教室も1万2千以上が全壊。そして国連の発表によるとネパールの人口の約30%にあたる約800万人が被災したと言われています。

そして当会の研修生の地域も被災したことから、当会としては初の緊急救援活動を実施。最初はとにかく「ネパールのために何かできることを」という想いで開始しました。その後は、現地からの情報や要請に応える形で募金を呼びかけ支援を実施してきました。以下、その動きを時系列でご報告させていただきます。

① 地震直後、途方に暮れる村人たち



② ランマヤさんと崩れた家



③ 募金活動を終えて。6ヶ国の多国籍チーム



* 1「SSS」:第一期の研修生バト・ビスタさんが立ちあげたNGO。クリニックの運営、学校建設、水道建設事業などを行う。2009年以降、SSSの活動地域から計7名を研修生として招聘。

4月25日 写真①

ネパールにてM7.8の大地震発生。元研修生たちの安否確認開始。

4月26日 写真②

ガハテ村の元研修生ランマヤさん(2012年度)よりメッセージが届く。「日本のみなさん、こんにちは。今はネパールとても大変です。たくさん人も死んだ…。私は大丈夫です。家族も大丈夫です。村で皆の家は破れた…。住むと食べるものは大変です。今も地震が来ています。何回も来ます」

4月29日 写真③

神戸・元町にて街頭募金活動を行う。研修生、ボランティア、神戸在住ネパール人が集って呼びかけ、約43万円ものご寄附をいただく。

4月30日 写真④

SSS*1への送金手続きを行う。送金額は街頭募金で集まった約43万円全額。

④ 食料や水の配給を行う
第一期研修生バト・ビスタさん



⑤ 畑にシートを貼って寝るバツサンさんたち



⑥ 現地調査を行う
SAGUNのカマル氏



5月1日 写真⑤、⑥

ガハテ村の元研修生バツサンさん(2011年度)から「家は何もありません。今は食べ物は何もありません。とても大変です。皆さん畑に寝ます。できれば助けてほしいです。本当に私たちはまだ生きるかな考えてる。地震まだあります」というメッセージが届く。

銀行振込、クレジット決済などでいただいた救援募金からSAGUN*2へ約42万円、ガハテ村の農業協同組合へ約30万円の送金手続きをおこなう。

SAGUNから現地状況と救援活動計画が書かれた「SAGUN震災救援支援構想」が届く。概要は次の通り。「SAGUNの活動地域において1360世帯が被災。マンガルタル地域では家屋の60%が被害を受けている。現時点で地域の人々は屋外で生活しており、避難場所にはトイレがないので、公衆衛生上の問題が深刻である。緊急にテントが必要であり、また薬などの物資も配布が必要である。この地域にはまだ政府や他のNGOからの支援が入っていない。活動地域全体の支援活動には約670万ルピー(約800万円)が必要である」

5月2日

元町で2回目の街頭募金活動を行う(募金額約55,000円)。

5月6日 写真⑦

SAGUNから救援活動開始の報告を受ける。「私たちは昨日、マンガルタル*3に行き、屋外での生活を余儀なくされている人たちにテントを配布してきました。さらに私たちは、数日以内にマンガルタルとカルパチョークに行き、基本的な薬の配布を行います。マンガルタルの人々を助けるためのサポート、支援金を集めてくれている

* 2「SAGUN」:「Sharing happiness(幸せ分かち合い)」をモットーにモノやカネの援助ではなく、参加型アプローチで地域開発を行う。事務局長は国際的に著名なファシリテーターのカマル・フィヤル氏。2013年以降、SAGUNの活動地域から計4名を研修生として招聘。

* 3「マンガルタル」:プレムさん(2013年度)とムクさん(2014年度)がいるピンタリ村と、今年度の研修生カンチさんのタクレ村がある地域。SAGUNの活動地域の一つでもある。

⑦ テントを提供するSAGUN



⑧ 阪神淡路大震災のときの共有も



⑨ トタンを探して店を巡る



ことに感謝します」(代表カマル・フィヤル氏)。

元町で3回目の街頭募金活動を行う(募金額約170,000円)。

5月7日

5月1日に手続きをしたSAGUNと農業協同組合への送金に不具合が生じた。現地の情報を収集しながら対応策を検討し、事務局長坂西をガハテ村へ派遣することを決定。

神戸新聞にネパール救援活動実施団体の一つとして掲載される。

5月8日

SSSから救援活動報告を受ける。

「私たちは、被災者に支援物資を届けています。我々はいくつかのセクターからご支援をいただき、それを支援が必要な人たちに届けています。特に私たちが農村の人々に届けているのは、テント、食料、安全な飲料水、そしてわずかではありますが、必要な薬です。報告できる情報が少なくして申し訳ありません。皆様のご支援に感謝します」(プログラムコーディネーターのビシュヌ・マニ氏)。

神戸学院大学の講義にてネパールの現状について報告を行う。

5月9日

兵庫県ユニセフ協会主催のつどいで、現地の状況報告を行う。コープこうべ職員と今後の支援活動について協議を行う。

5月12日

M7.3の余震が発生し、家屋の損壊・倒壊の被害が拡大する。

5月14日

神戸市シルバーカレッジでの講義にてネパール大地震の報告を行う。国際友の会の方々を実施している募金活動に研修生と参加。

5月16日 写真⑧

坂西がネパールのガハテ村に入る。農業協同組合の人たちと支援物資の購入や配布について協議。ガハテ村全世帯を対象に、トタンと米を配給することを決定。

5月17日 写真⑨、⑩

トラックを手配し、バネパでトタン(8枚1セットで4,800Rs.)を63セット購入(約40セット不足)、米(1袋25kg)を121袋購入。ドゥリケルで救援物資



⑩ 夜遅くにも関わらず村中の人が集まる

のチェックを受け、クンタの警察に申請、警察官に配布の際に同行してもらった。夜、ガハテ村にて物資を配布。

5月18日 写真⑩

農業協同組合のメンバーとミーティング。トタンの不足分に加え、最終的に各世帯に1.5セット(12枚)にして後日配布することに決まる。トタンを購入するための資金を組合に託す。



⑪ ウルミラさんも被災しながらも助産師として活動中

5月21日 写真⑪

パッサンさんから「各世帯1.5セット配布予定だったトタンは在庫不足だったので、買える分だけを購入し、残りのお金でテント・油・塩を100世帯分購入した」と報告があった。

送金完了できなかったSAGUNに対して、約77万円送金手続きを行う。



⑫ トタンの追加配給の様子

5月22日

金融機関の混乱からか、送金できないと言われていたSAGUNへの1回目の送金が完了できていたことが判明。

研修生からお礼のメッセージが届く。「今日は、ガハテ村のみんなの人たちに、トタン・油・テント・塩をあげました」(パッサンさん)。「皆さん、心から本当にありがとうございます。地震が来て大変な時、私たちの村を手伝ってくれて、村の人たちからも、ありがとうございます」(ランマヤさん)。



⑬ 少なくなった湧水

5月23日 写真⑬

元町で第4回目の街頭募金をボランティアの方主導で行う(募金額約34,000円)。

パッサンさんから湧水が少なくなっているとの報告がある。

5月25日

SAGUNと連絡を取り、中長期計画*4として第一段階：緊急援助、第二段階：雨季対策、第三段階：住宅再建であることを確認。



⑭ 追加支援の対象となったダリットの子どもたち



⑮ コーヒー、紅茶、マサラなどを販売

ネパール大地震の被災者支援フェアトレード商品！！

収益は現地フェアトレード団体 Mahaguthi (マハグティ) を

通じて Nepal Charkha Pracharak Gandhi という

マハトマ・ガンジーの思想を实践するアシュラムに送られる。

被災者女性の雇用訓練に充てられます

対象となる女性は被災者女性の中で特に窮乏や家族を亡くした女性、DV被害の女性など、社会的に脆弱な状況にある女性たちで、ネパール各地から選ばれ、約1年間の研修を受けた後、地元に戻り起業を行うことを目的としています。2015年度は被災者女性を100名受け入れます。



⑯ ネパールで感じたこと、課題を報告

* 4 SAGUNの「中長期計画」：第一段階は緊急支援として、テント・薬・照明・医療・搬送・生活必需品(毛布や石けん等)の配布。第二段階は雨季に対応するための仮設住居建設支援として、各世帯に約40,000円。雨をしのぐトタン板が24-30枚ぐらい必要。第三段階は耐震性も考慮に入れた住居再建支援として、一軒当たり約36万円。

5月26日

PHD協会の理事会にてネパール報告及び今後の支援について協議を行う。

5月27日

神戸NGO協議会にてネパール支援活動の報告を行う。

6月1日

ガハテ村で小学校が再開、パッサンさんも教師を再開する。

6月2日

阪神シニアカレッジでの講義にてネパール支援活動の報告を行う。

6月5日 写真⑭

支援が届いていなかったダリット(不可触民とされている人たちであるSarki)の世帯に米・トタン・塩・油を支援。

6月6日 写真⑮、⑯

33期生来日報告会にてネパールの状況と支援活動について報告を行う。また、ネパール被災者女性支援フェアトレードグッズの販売を開始。

コープこうべとの共催でネパール地

震緊急報告会を実施。約20名が参加、その後、コープこうべ職員と今後の支援に関して協議を行う。

6月8日 写真⑰

ランマヤさんから助産師として活動中との報告を受ける。



⑰ 医療活動を行うランマヤさん



⑱ パッサンさんが作った仮設住宅

6月9日 写真⑱

パッサンさんからメッセージが届く。「私の新しい家です。今は強い風が来ても大丈夫です！みなさんにありがたいです。本当に私からできるのは、何もないです。とても心が痛いです。私は、みなさん神様と思います。ありがとうございます」

6月13日

ネパール雨季に入る。

6月19日

日本基督教団兵庫教区主催、榎戸健次郎ドクター報告会に坂西が参加し、活動報告を行う。同教区からご支援をいただく。

6月17日～23日

職員今里がマンガルトール(p.2の地図参照)を訪問。元研修生のプレムさん(2013年度)、ムクさん(2014年度)の状況を把握。今年度の研修生カンチさんのタクレ村を訪問。SAGUNと今後の支援に関して協議を行う。

* 訪問時のことは、p.8の「日々是東奔西走」をご覧ください。

今後の方針

「村の声を聴きながら、必要な支援を」

現在は第二段階の雨季対策に対応するべく支援を行っているところですが、あくまで仮設建設という急場をしのぐための支援であり、今後は第三段階として住宅再建、生活再建のために息の長い支援が必要になってきます。

当会としては村の人の声を聴きながら、カウンターパートである現地NGOとの連携のもとに支援を続けていく予定です。基本は現地状況に対応し、ボトムアップでの支援を行っていきたく思っていますので、現時点で明確な支援計画はたっていません。日本側だけで決めてしまわないという原則も

また大切にしている方針だからです。

ちなみに現地NGOから現時点で課題として挙がっているのは、より困難な状況にある寡婦、高齢者、障がい者の方々への仮設建設支援、小学校の補修、シェルターの建設などです。

また息の長い支援としては、当会の得意分野である研修事業において防災研修の充実、及び防災をテーマとした研修生の招へい、被災者女性の雇用訓練につながるフェアトレードグッズの購入、観光収入が重要なネパールへの積極的なスタディツアーの開催、現地農業協同組合の応援、クリニックの建

設なども想定されます。

繰り返しになりますが、上記はあくまで想定であり、現地の刻々と変わるニーズに柔軟に対応していきたいと思っていますので、全く別のものにも変わる可能性もあります。ただどのような支援になっても、ご寄附くださった方々のお気持ちを大切に被災者、特に村の人たちにできるだけ直接支援を届けられるように努めていきたいと思っています。

ネパールの復興には息の長い支援が必要になると思われます。今後ともご支援よろしくお願ひします。(坂西卓郎)

ネパール大地震

既報の通りネパールで地震が起こった。それまでこの稿では、サンティダさんの来日の顛末やIS問題について私見を述べようと思っていたのだが、それどころではなくなった。

緊急援助を専門としていない協会としては地震直後、ともかく研修生の安否確認に注力した。しかし、徐々に被害が明らかになるにつれ、研修生たちの地域も甚大な被害を受けていることが分かってきた。その後の動きは特集で既に報告した通りであるので、この稿では救援活動の中で感じたことを述べたい。

◆専門は「村の人の声を聴くこと」

繰り返すが当会は緊急救援活動が専門ではない。よって、ノウハウが少なかった。例えば街頭募金、当会では初めての経験だった。幸いにも近くに経験者が居り実施することができた。当会の財産である人的ネットワークに助けられた形だ。

だが実際の救援活動はまさに闇の中の大海を泳ぐように手探りで進めるしかなかった。結論から言うと、当会は緊急援助のノウハウや経験はなかったが、今まで培ってきた村の人との関係性と対話術により村の人の声を直接聴くことができる。それこそが当会の専門性であり、今回の対応も「村の人の声を聴く」を頼りに進めることができた。一見当たり前聞こえるかもしれないが、これがなかなか難しく、かつ重要なのだと現地訪問で教えられた。

◆ネパール政府（以下ネ政府）の政策

順を追って説明したい。最初のつまづきはネ政府の「単一窓口政策 one-door policy」から始まる。これはネ政府が「支援の一元化を行い、公平性を

担保する」ための政策で、海外からの震災義捐金は自動的に「首相災害救援基金（PMDRF）」に移されてしまうというものだ。考え方自体に異論はないのだが、ネ政府による資金凍結の可能性もあり、国際世論から大きな批判を受けることになった。最終的には震災以前に登録していた口座、もしくは新たに許可を取った口座への送金が可能という事が確認されたが、震災当初は大きな混乱を生んだ。

それに起因してか、当会の送金も現地団体での到着確認ができないという状況が続いた。そういった状況を見かねて私がネパールへ行き、直接現地団体と協議を行うことになり、5月16日に現地入りした。

◆村人主体の救援活動

私の手持ちには「村の人の声を聴く」という以外の方法論がない。よって、到着後まず行ったのはガハテ村農業協同組合のメンバーとの話し合いである。



とにかく村の人と話す

まず阪神・淡路大震災の事、街頭募金のことを共有した。そして支援物資について協議を行った結果、米とトタンになった。水田が一部にしかないガハテ村では農民とはいえ、米は買わなければならない。そして家が壊れた今、とりいそぎ雨露をしのぎ、仮設住宅を建てるためにもトタンが必要とのことだった。必要なモノが山ほどある中で、その優先順位を村の人たちに決めてもらえたのは良かった。ここまではスムー

ズだった。

◆世帯の定義は？「同じ竈を使う」

難航したのはここからだった。「誰にどのように分配するか」だ。まず「誰に」という点ではガハテ村では政党により住民が二つに分かれているのだが、その片方の政党だけ、つまり自分たちの政党だけでいいのではないか、という声も強かった。さすがにここで意見を言いたくなかったが、最終的にはパッサンさんたち若い世代の意見が通り、対象は村の全世帯となった。

次に「どのように」という点では世帯の定義が問題となった。ガハテ村には家は121軒ある。しかし、家は別でも同じ竈で一緒に食事を食べる世帯がある。例えばパッサンさんの家も隣の家に祖父母が住んでいるが、食事は一緒だ。このような場合1世帯、2世帯か。結論としては「同じ竈を使っているのが一世帯」とすることになり、トタンは世帯毎、しかし米はそれだけ人が多い訳だから一軒毎に配布することとした。この決定は実際の配布でもうまく機能した。さすがは当事者である。

◆トタンが買えない？

方針も決まり、翌日朝早くから意気揚々と支援物資の購入にバネパという町に向かった。バネパはほぼ無傷で、トタン屋もすぐに見つかった。後は買うだけと思ったら、なかなか売ってくれない。

実はネ政府が意外にも機能しており、便乗値上げをした場合には罰金をとる、また買占めを防ぐために一人当たりの購入個数制限を設けていた。公正性という観点では素晴らしい取り組みであるが、おかげでトタン屋を探して走り回るようになった。

結局67セットしか買えず、残りの40セットは再度購入しに行かざるを得な

くなった。幸い米は問題なく、121軒分購入できた。ここでも「袋が破れた場合に二つぐらい余分に買っておこう。足りないは大変だ」と確実に軒数分行き渡らせることになりかなり気を使っている様子が伺えた。それだけ村の人にとって公平性が大事なのだろう。

最終的にガハテ村で支援した物資は右の表の通りである。

皆様からのご支援のおかげに必要な物資を被災者に届けることができた。しかし、雨季を凌ぐためのトタンは本来24～30枚必要であり、今回支援した8枚だけでは到底足りない。

ただ村の人は強い。その生活力の高きで少ない資材でもなんとか仮設を建てるのだから素晴らしい。私などには到底真似できない。



皆様の支援が村の人たちを笑顔に

◆警察のチェックを受ける

今回のような救援物資の配布には警察の許可を受ける必要があるということで、まず郡の警察に行き、積み荷を確認してもらった。次に地域の警察に行き、配布の同行をお願いする。積み荷の確認は地域間での公平性を保つため、同行は暴動を防ぐためである。

今回はガハテ村が支援から取り残されているということで支援を行ったが、当然のように隣の村も被害を受けているし、地域中が被災している。そのカバーは地域NGO及び地方行政にお願



警察のチェックを受ける

ガハテ村への支援

トタン 1セット8枚	@ 4,800 Rs. × 100 世帯	480,000 Rs.	576,000 円
米 25kg	@ 1,330 Rs. × 121 軒	160,930 Rs.	193,116 円
遺族への見舞金	@ 5,000 × 3 世帯	15,000 Rs.	18,000 円
トラック、その他費用		88,330 Rs.	105,996 円
テント	@ 1,944 Rs. × 100 世帯	194,400 Rs.	233,280 円
トタン追加分	@ 1,598 Rs. × 100 世帯	159,800 Rs.	191,760 円
油と塩	100 世帯分	16,715 Rs.	20,058 円
トラック代		1,500 Rs.	1,800 円

セティティビ小学校に通うダリット (Sarki) の世帯への支援

トタン 1セット8枚	@ 4,770 Rs. × 10 世帯	47,700 Rs.	57,240 円
米 25kg	@ 1,325 Rs. × 10 世帯	13,250 Rs.	15,900 円
油 1リットル	@ 125 Rs. × 10 世帯	1,250 Rs.	1,500 円
塩	10 世帯分	180 Rs.	216 円
トラック、その他費用		4,750Rs.	5,700 円

総計 1,183,805 Rs. (約 1,420,566 円)

いするしかない。そのためにきちんとした報告や相談は重要で、常に地域間のバランスを考慮しながら活動していく必要があることを痛感させられた。

◆「私は大丈夫。他の人を助けて」

中には配布を受け取らない人もいた。農業協同組合のメンバーであるが、「私はそれほど大変じゃない。だから、私の分は亡くなった人たちの家族への支援にしてくれ」と。皆が被災している状況でのこの言葉に感動させられた。その心意気に打たれ、皆で協議し、少し上乗せして遺族への見舞金とした。

まさに岩村先生の「生きるとは分かち合う事、弱き者と」の実践者こそが村の人なんだと改めて教えられた。

◆現地NGOと村の人のギャップ

最後にこのことは指摘しておきたい。今回の大震災において現地NGOの活動には頭が下がるばかりである。彼らがいなければ日本にいる私たちは何もできない。感謝しかない。しかし、一方で、NGOと村の人の声との間には差異も多い。どちらの主張も理解できるものであり、どちらが良い悪いではない。ただ構造的に村の人の声を通る環境がどうかと言われれば疑問が残る。実際に、ある現地NGOと激論を交わすことにもなったが、冒頭に述べたよ

うに当会は直接村の人の声を聴くことが可能である。双方の話を聞きながら、その溝を埋めていくことが当会の大きな役割でもあると感じた。なぜなら関係者全ての目的は同じだからである。

ミャンマーでの新展開

ミャンマーで現地ボランティアスタッフを2名採用することになった。選考の結果、06年度研修生のスースーテインさん、13年度研修生のモーママさんが選ばれた。今後は現地でのニュースレターの発行やスタディツアーの企画運営、他の研修生のサポートなどを行ってもらう予定。

以下は、モーママさんからのメッセージ。「みなさん、こんにちは！！今日から一年間よろしくお祈りします！村のためにがんばります。わからない時は皆さんが教えてください。私が悪い時は怒ってもいいです。よろしくお祈りします！」



ボランティアスタッフに選ばれた2人

日々は東奔西走

研修担当 今里拓哉

大地震発生から約2ヵ月が経ち、ネパールが雨季に入ったところで、プレムさん（13年度）、ムクさん（14年度）がいるピンタリ村と今年度カンチさんの出身地タクレ村を訪問してきました。緊急救援として配布されたブルーシートではもはや雨風は凌げず、村人たちは屋根にトタンを用いた仮設住宅で夜を明かすようになっていました。

より必要とする人々へ

とは言え、日本のように政府が仮設住宅を整備してくれるわけではありません。村人

は材料の調達から建設まで、自ら行います。よってその形は様々で、壁としてトタンを用いているところもあれば裂いた竹を用いるところもあります。床は土間のままのところも殆どでしたが、中には一段高くして板張りになっているところもありました。

3日間の滞在のうち、プレムさんの仮設住宅で2日間寝泊りさせてもらいました。もともとあった塀や家から持ち出した棚などを壁に用いた小屋にベッドを5つ置き、そこに3世帯12人が一緒に寝ました。雨が降ればトタンを叩きつけるその音で寝付けず、降らなければ蒸暑い。蚊帳がない人は虫刺されにも悩まされ、特に子どもたちにとって寝づらいようで、あちらこちらから泣き声が聞こえてきました。

ピンタリ村の仮設住宅に泊ってみて

快適とは言い難い仮設住宅で夜を明かす日々。それでも「私は借金してトタンを購入し、仮設住宅を建設することができました。だから大丈夫。でも寡婦や高齢者など社会的に弱い人たちは借金もできず、仮設住宅を作ることができません。助けが必要です。」と語るのはムクさんです。実際、プレムさんの仮設住宅内には近所の母子家庭と一緒に寝泊りしていました。助け合いにより何とかこの苦境に耐えている研修生と地域の人々。私たちは彼・彼女たちの声を現地NGOに伝えつつ、その活動を支援し続けていきます。



12人が夜過ごしているプレムさんの仮設住宅内部



カンチさんのご両親は未だビニール屋根の仮設で寝泊りしています

【報告】インドネシアの大学で講義！

3月14日、ご縁をいただきインドネシア・パダンにあるAKBP大学で講演をしてきました。対象は経済学部の学生約150名で、8割方女性。内容は「日本人がインドネシアの村に来る理由」と「水俣から考える国際協力」。もちろんPHD協会の話をもベースに展開しました。

話し手冥利につきる国、インドネシア？

また国際協力を考えるじゃんけんワークショップ、インドネシア版も行い盛り上がりしました。現地事情に詳しい方曰く「インドネシアはお祭りでも講演会でも選挙でもとにかく何でも楽

しんでやろうという国民性。話し手にはたまらない環境ですね」とのこと、確かに病み付きになるほどレスポンスが良く、楽しかったです。それだけでなく学生の方々は大変優秀で質疑では「あなたは経済構造の変革を主張するが、既に勝ち組となっている先進国はそういった変化を望まないと思う。どのように変革していくのか？」と言った鋭い質問もありました。気温が高い中で3時間ぶっ続けという過酷な環境での講義でしたが、エネルギーで優秀な学生たちのおかげで充実した時間となりました。またやりたいです。

(坂西卓郎)



セッティングがインドネシア風で豪華



じゃんけんワークショップ、大盛り上がり

2015年度事業方針・計画

■ 方針

今年度は研修生の帰国後のフォローアップに力を入れていきます。具体的には現地事務所の設立、現地ボランティアスタッフの採用など、新たな試みに挑戦します。また村に残りたい人が残れるように「地域での生業づくり」にも研修生と共に取り組んでいきます。

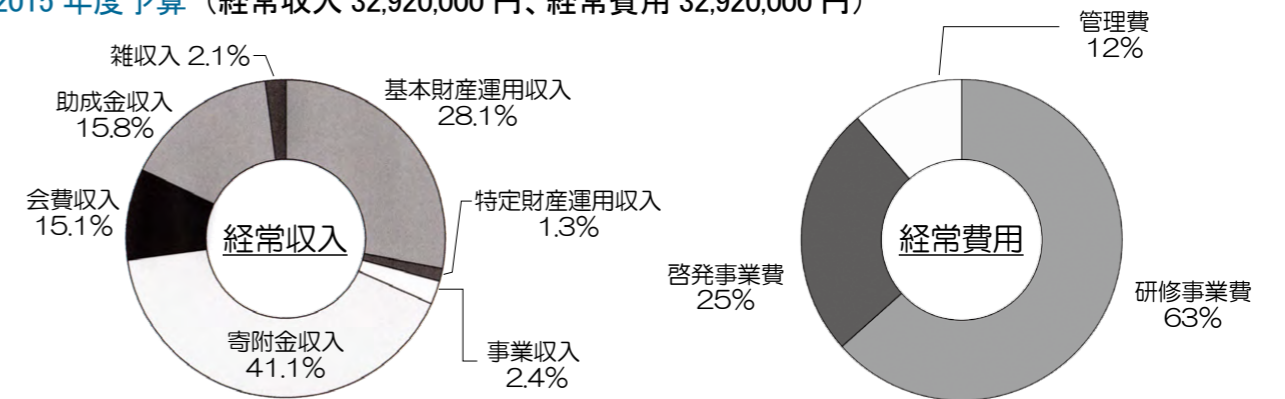
■ 研修事業

今年度は研修生の希望に合わせ、新しい研修の形に挑戦します。サンティダさんは米苗を学ぶためゴールデンウィークから研修を開始。ゾンさんは新しい研修分野となる淡水魚の養殖研修を。カンチさんは応急手当研修のため大学とのコラボレーションを模索しております。

■ 啓発事業

当会の活動に多くの方が参加していただけるよう、今年度も日本の人と研修生が出会う場づくりを軸とします。また、様々な人が集い横のつながりが生まれる場を企画・提供します。広報活動では会報のページ数を増やし、適宜フルカラー印刷を取り入れ、内容も充実させていきます。

■ 2015年度予算（経常収入 32,920,000円、経常費用 32,920,000円）



ロータリー米山記念奨学会

2015年度も米山記念奨学生として受入れて頂きました！



篠山ロータリークラブ

篠山ロータリークラブでは例年、ネパールからの研修生を受入れて頂いておりましたが、10年振りにインドネシアの研修生をお世話頂いております。初めての例会でゾンさんは、日本語でのスピーチをお褒め頂き、とても嬉しかったようです。

昨年度、インドネシアからの研修生をお世話いただいた加古川ロータリー

◆今年度のお世話クラブとカウンセラーの方々◆

川西ロータリークラブ・北川博崇さん
加古川ロータリークラブ・保地富夫さん
篠山ロータリークラブ・井上隆雄さん

…サンティダエー（サンティダ）さん
…カンチ・マヤ・タマンさん
…シャフルル（ゾン）さん

クラブでは、ネパール出身のカンチさんを受入れて頂いております。歓迎会を開いて頂き、カンチさんを含め、みなさんの笑い声が飛び交う楽しい会でした。

川西ロータリークラブでは07年度、13年度にミャンマーからの研修生を受入れて頂いたご縁から、サンティダさんがお世話になっております。例会では、過去の研修生の様子についての会話が花が咲いています。

4月25日に発生したネパール大地震を受け、2680地区米山記念奨学会委員の方々、神戸中、加古川、篠山ロータリークラブの皆様からネパール救援募金を頂きました。ネパールの復興に活用させていただきます。(井上理子)



加古川ロータリークラブ



川西ロータリークラブ

33期研修生レポート (今里拓哉) 各地での研修が始まりました。

カンチ・マヤ・タマンさん (27歳・ネパール)

「マイペースな頑張り屋さん」

タクレ村は首都カトマンズから南東へバスで約4時間離れたマンガルタル地域内の村です。同じ地域にはプレムさん(13年度)やムクさん(14年度)、クンジュマヤさん(14年度短期)のピンタリ村も属しています。よってカンチさんはマンガルタル地域からは4人目、タクレ村からは最初の研修生となります。

集中すると周りが見えなくなってしまうのでしょうか、日本語の復習の際、休憩時間に入っても一人黙々と勉強を続ける姿を良く目にしました。周りがお菓子を食べながら談笑していてもお構いなし。キリが良いところまで終えなければペンをなかなか置かない、マイペースぶりです。

主な研修テーマは教育と応急手当。家が農家なので農業にも関心がありますが、「プレムさんとムクさんが農業を勉強してくれました。だから私は他を学び、地域に広めます」と自分の役割を定めています。



ご両親とカンチさん



カンチさんの畑からの風景

1年間お世話になります！

シャフルル (通称: ゾン) さん (36歳・インドネシア)

「真面目でお茶目なお父さん」

国際空港があるパダンから車で約4時間かかるタランバプンゴ地域のカユジャングイ村から、アフリタさん(04年度)、プットラさん(06年度)、ダリスマンさん(13年度)に続く4人目の研修生です。

36歳にして日本語という難しい言葉を勉強し始めて2ヵ月。他の二人とは異なり、ゾンは村で日本語の勉強をほとんどできずに来日しました。しかし人一倍努力し、今では日本語で冗談が言えるほど上達しました。

村では家族を養うために、仕方なく町で大工の仕事などをもしてきました。しかしゾンは家族と離れることなく、村内で生計を立てられるようになることを目指しています。そのため農業や家畜、そして淡水魚の養殖などを学び、皆が村で暮らせる方法を模索しています。

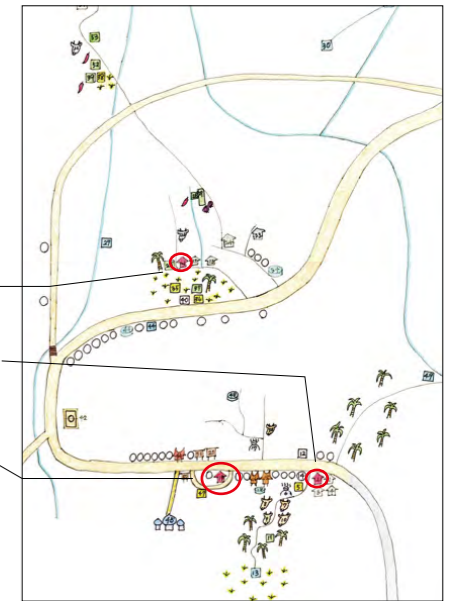


タランバプンゴ

ジャカルタ



お連れ合いと子ども3人



ダリスマンさん(13年度)の家

アフリタさん(04年度)の家

ゾンの家

カユジャングイ村の地図

研修したいこと

■ 保育・就学前教育

「村では幼稚園と小学校の先生として働いています。ネパールの先生の多くは教材を上手に活用できていません。日本ではどのような工夫がなされているか勉強したいです。」

■ 応急手当

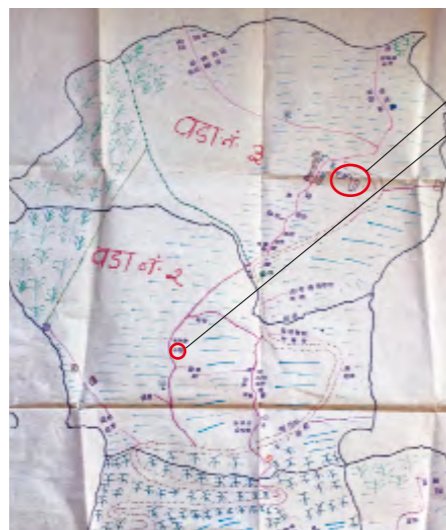
「村には診療所もなければ、医者もいません。小さな切り傷でも治療のために山を下り、ヘルスポストに行かなければなりません。私が応急手当をできたら、村に貢献できると思います。」

■ 保健衛生

「無医村なので病気の予防が大切です。公衆衛生や栄養について勉強したいです。」

■ 農業

「村ではトウモロコシや玉ねぎなど多品目を作り、家畜も牛、ヤギ、鶏などを飼育しています。日本では特に土壌改良の方法を学びたいです。」



カンチさん手書きのタクレ村の地図



地震後、村人は野外生活を強いられている

カンチさんが教えている学校

カンチさんの家

■ 滞在家族

木村道子さん (西宮市)



来日直後の母国の地震により、電話がつながらず心配な日々が続いていました。やっとつながっても泣いている姿もありました。5月末、日本にいる間の目標を書いてもらうと、紙一杯に書き尽くされていて、賢明さを感じました。食器洗いも丁寧で、時々洗濯干しやたたみも手伝ってくれます。アイロン、裁縫などこまめに身だしなみを整えています。

研修したいこと

■ 有機農法全般

「化学肥料や農薬の弊害について聞いたことがあるので、自分の畑では極力使用を避けています。しかし詳しくは理解していないので、村にある牛糞、鶏糞、落葉などを活用した有機肥料の作り方とその使用方法について学びたいです。」

■ 魚の養殖

「家の横に池を作り、そこで魚の稚魚を放して養殖しています。しかしエサを与える以外、世話や管理は特にしていません。淡水魚の養殖を日本で勉強し、地域の人も広めたいです。」

■ 家畜

「田んぼはなく、畑面積も狭いため十分な収入を得ることができていません。家族を養い、村のボランティア活動を継続するためにも、出稼大工以外の収入源が必要です。日本で養鶏や牛について学びたいと思っています。」



栽培している豆類



養殖している魚

■ 滞在家族

葛原時寛さん、香織さん (神戸市)



家族がひとり増えたみたいで、にぎやかになって楽しいです。休みの日は、「仕事、仕事」といって、草刈りなどを手伝ってくれます。

来てから1ヵ月ほどは何でも食べていたけれど、最近は食べず嫌いのところがある。例えば、肉だけを食べて野菜は食べなかったりするので、これから夏に向かって、体のバランスを心配します。

サンティダエー (サンティダ) さん (20歳・ミャンマー)

「しっかり者のお姉さん」

マンダレーから車で約1時間離れたタダインシェ村出身。ミャンマーからの研修生招へいを再開してから3人目の研修生となります。

事務所で昼食を調理する際には、いつもラペットゥという発酵した茶葉を入れたサラダを振る舞ってくれます。後片付けや手洗いなども率先してやり、自分のやるべきことを意識的に探す、しっかり者です。しかし休憩に入るとすぐスマホを取り出す、今どきの人でもあります。

農業に教育に保健衛生と、研修テーマが多岐に渡っているサンティダさん。日本での研修を通じて広く学ぶことにより、今後の村での立ち位置を考えます。



左から、弟、祖母、母、サンティダさん、妹



研修したいこと

■ 有機農法全般

「家族は田んぼを約7ヘクタール(町)所有し、化学肥料や農薬を散布しています。しかし年々使う量が増え、心配です。農薬や化学肥料に頼らない有機農法やその考え方を基本から学びたいです。」

■ 保育・就学前・初等教育

「モーママさん(13年度)が家で塾を開いたので、私も約1年間一緒に小学生に勉強を教えていました。担当している教科は英語と数学。教えることは好きで、教師になりたいと思ったこともあります。日本の教育現場を見学し、日本の先生たちの教え方を参考にしたいです。」

■ 保健衛生

「地域のボランティアグループに所属し、下痢などの病気を防ぐために、衛生的な飲み水や手洗いの重要性などを地域住民に啓発していました。村人の病気を防ぐため、保健衛生を学びたいです。」

モーママさん手書きのタダインシェ村の地図



田んぼの様子



子どもたちに勉強を教えています

■ 滞在家族

榊克育さん、かおりさん(神戸市)



文化や慣習の異なる日本での生活は戸惑うこともあると思いますが、彼女の明るい前向きな姿勢に大変好感を持っています。

勤勉で努力家で、平日はいつも夜遅くまで勉強し、休日は2人の幼い子どもたちとよく遊んでくれます。子どもたちも彼女をとっても慕っています。彼女は子どもが転んで泣き出すと誰よりも早く一目散にかけつけます。彼女らしい微笑ましい光景です。

PHD 活動紹介 3月～6月末



3月

- 1日 国際ロータリー第2680地区 地区大会 (井上・吉川・坂西)
- 2日 チャリティショップセミナー 参加 (坂西・井上)
- 3日 NGOインターンプログラム成果報告会 (坂西・工藤)
- 5日 草の根技術協力事業・制度見直しに関する関西地域NGOとの意見交換会 (坂西・工藤)
- 7日 32期研修生帰国報告会
- 8日 米山記念奨学会 歓送会 (井上・研修生3名)
- 10日 関西NGO協議会 理事会 (坂西)
- 11日 32期研修生離日
- 14日 祭 in 住吉 バザー (芳田)
- AKBP大学(インドネシア西スマトラ州) 講義 (坂西)
- 15日 神戸国際交流フェア (井上)
- 24日 コープともしびボランティア振興財団 理事会 (坂西)
- 25日 NGO-JICA協議会 (今里)
- 26日 国際ソロプチミスト神戸 チャリティバザー (芳田)
- NGO事業補助金監査 (坂西・井上)



帰国報告会(神戸市)

4月

- 7日 ブランディング研修フォローアップ (坂西・井上・今里・芳田)
- 11日 日本語復習ボランティア説明会 (今里)
- 12日 ロータリー米山記念奨学生 オリエンテーション (井上・坂西・今里・研修生3名)
- 13-14日 アーユス合宿 参加 (坂西)
- 15日 PHD協会 役職人事委員会
- 16日 生活協同組合総合研究所 報告会 (井上)
- 19日 神戸YMCA総主事就任式 参加 (坂西)
- 29日 ネパール緊急救援街頭募金



アーユス 合宿(東京都)

5月

- 1日 ネパール緊急救援街頭募金
- 6日 ネパール緊急救援街頭募金
- 7日 第12回多文化共生のための国際理解教育・開発教育セミナー 打ち合わせ (坂西)
- 8日 神戸学院大学 講義 (坂西)
- 9日 ユニセフ国際理解講座②「ネパールを知ること」 講義 (坂西・井上)
- 11日 国際協力連続セミナー in JICA関西 参加 (坂西)
- 14日 神戸市シルバーカレッジ 講義 (坂西・研修生3名)
- 甲南高等学校 相談 (坂西)
- 15日 ネパール・ミャンマー出張 (坂西) ~ 25日
- 17日 和歌山国際交流センター「ネパールチャリティイベント」 NGO相談員 (井上)
- 21日 コープこうべ(生活文化センター) ネパール救援募金活動 (今里)
- 23日 ネパール緊急救援街頭募金
- 26日 PHD協会 理事会
- 27日 神戸NGO協議会 例会 (坂西)
- 29日 関西NGO協議会 関西地域NGO助成プログラム説明会 参加 (坂西)
- 30日 関西学院大学サービスマーケティング 3名受け入れ (芳田)



ジョイラックデー バザー(神戸市)

6月

- 1日 CODE ネパール地震被災地支援活動派遣スタッフ報告会 参加 (坂西・井上)
- 2日 阪神シニアカレッジ 講義 (坂西・研修生3人)
- 3日 シルバーカレッジミャンマー班 NGO相談員 (坂西)
- 6日 33期研修生来日報告会
- ネパール地震緊急報告会(コープこうべ・PHD協会共催)
- 8日 JICA北陸 NGO相談員 (坂西)
- 9日 PHD協会 評議員会
- 10日 神戸市シルバーカレッジ ジョイラックデー バザー (芳田)
- 11日 神戸新聞 取材 (坂西)
- 13日 スタディツアー合同説明会 (芳田)、NGO相談員 (井上)
- 17日 NGO/JICA 推進員会議 (井上)
- ネパール出張(今里) ~ 23日
- 朝日新聞 取材 (坂西)
- 19日 榊健次郎ドクター ネパール救援活動報告会 参加 (坂西)
- 24日 関西NGO協議会 理事会 (坂西)
- 関西NGO協議会 ブランディング研修フォローアップ (坂西)
- 25日 親和女子大学 講義 NGO相談員 (坂西)

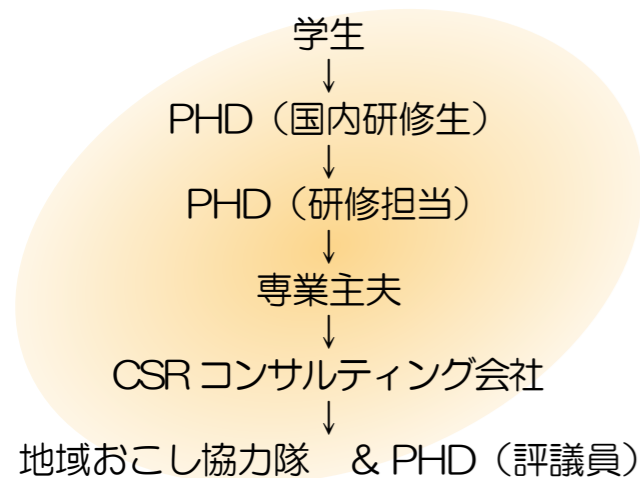


研修生来日報告会(神戸市)



スタディツアー合同説明会(京都市)

PHD 経由のひと vol.3 ~納堂邦弘さん~



長かった保育園送迎 10 年間… (写真は 2011 年当時)

お久しぶりです！

2005 年の春に PHD を退職してから、ちょうど 10 年が経ち、このような原稿を書かせていただいていることに人生の不思議さというか面白さを感じます。

PHD から始まった私の社会人人生がその後のように紆余曲折し、そしてこれから評議員としてどんなお手伝いをしたいと考えているのか、少しでもお伝えできればと思います。

いざ、東京へ

ずっと関西で生活してきた自分が東京に行くことになることは夢にも思っていませんでしたが、退職と妻の転勤のタイミングが重なり、まだ生まれたばかりの長女を連れて引越すことになりました。長い人生で一度くらいは“花の都大東京”に暮らすのもいいか、という好奇心が勝り、特に不安や抵抗はなかったと記憶しています。

東京での最初の半年間は専業主夫として過ごしました。PHD 時代は、日本中の研修先や海外の研修生の村を飛び回るような生活で、その反動という面もありました。まだ「イクメン」というオシャレな呼び名はなかった時代。例えば、予防接種会場で 200 人くらいの母子の中で父親が一人だった光景は今でも忘れられません。

楽しみにしていた三食昼寝付きの生活は 3 日で飽き、まだ言葉も通じない小さな子どもと二人っきりで一日中過ごしていると、育児ノイローゼになる方の気持ちがよくわかりました。人が生きていく上で、仕事や地域活動などを通じて社会と関わることがいかに大切なことか、身をもって経験することができたのは、この時期の一つの大きな収穫でした。

大企業を通じて世の中を見る

そろそろ仕事を探そうかと思った時に目に飛び込んできた言葉が、「CSR (企業の社会的責任)」。それはまさに私が PHD 時代に研修生たちの村で目の当たりにした、先進国の大企業が彼らの生活に迷惑をかけているという事実と表裏一体の世界でした。

日本の大企業やそこで働く人たちがどのような考えを持っているのか知りたいと思い、企業相手に社会貢献活動やその報告書制作の支援をする民間のコンサルティング会社に入りました。そこでわかったことは、組織が大きすぎて保守的になる傾向が強いものの、上手に付き合えば豊富な資金力や人材をうまく社会課題の解決に振り向けることができれば、世の中を動かせるほどの大きな影響力がある、ということでした。

そして、3.11

そんな中、ちょうど都心の職場にいた時に大きな揺れがやってきました。交通機関が完全に麻痺し、いわゆる帰宅難民となり、結局その日帰れたのは深夜 3 時頃。原発事故も起こり、スーパーから食料や水、電池などの品物がどんどん消えていくなど、一種のパニック状態が広がっていきました。一見便利な都会の生活が、いかに脆い基盤の上に成り立っていたか、白日の下に晒された感じがしました。PHD の研修先や研修生の村での生活の方がいかに地に足がついているか再認識することとなりました。

被災地でのボランティアや復興支援活動を行う中で、日本の地方が抱える厳しい課題と直面することになります。少子

高齢化に伴う生産人口の減少や補助金頼みで継続性のない事業の数々…。同時に、様々な社会課題の解決には、起業家精神や小さなビジネスとして成り立たせることの重要性を知ることになります。

「不惑」を迎えて…

「四十にして惑わず」という世界とは程遠い自分の人生ですが、20 代、30 代の経験を踏まえて、次は日本の地方に身を置き、自らの生業をすることでその地域に貢献したいという道を選びました。協力隊としての日々は、また次の機会に書きたいと思いますが、人口が毎年 100 人減っていくという日本の典型的な中山間地域において、自分に一体何ができるのか焦らずに一つ一つ挑戦しているところです。

研修生たちの生活スタイルや村の様子もこの 10 年で、大きく変わったことでしょう。研修生たちと Facebook で繋がり、連絡を取り合えるようなことは 10 年前には想像もできなかった世界です。

モノやカネに依らない国際協力を、という PHD 協会の基本理念には何の問題もありません。ただ、それぞれの研修生や私たちが生業を作るそのやり方や選択肢はどんどん変化し、多様になっているのも事実です。私は今、これから自分が「課題先進国」日本で実践していくことを研修生たちと共有したり、アドバイスを交換したりすることで、「共に生きる」一つの形を体現したいと思っています。それが、地域おこし協力隊でありながら、PHD の評議員となった大きな理由です。

PHD の体制もいい意味で若返りが進んでいます。私が研修担当をしていた時に国内研修生だった坂西さんが水俣で経験を積んで、事務局長として PHD に戻ってきたことにも縁を感じました。

まだ始まったばかりの二足のわらじの試みですが、温かいご指導とご協力のほど、よろしく願いいたします！



美しい農村風景の前で里山の魅力や課題を紹介中 (内子町)

PHD NEWS

◆会費・ご寄附寄託状況

2月	58件	¥596,145
3月	69件	¥777,246
4月	235件	¥1,334,927
5月	226件	¥3,910,133
588件		¥6,618,451

上記の通り、ネパールへの救援募金を含め、多くの皆様より貴重なご浄財を賜りました。皆様のご協力に心より感謝を申し上げます。

※上記の内、228件 ¥4,754,872 はネパール地震緊急救援募金への寄付金です。

◆海外からの研修生と共に学びませんか？

国内研修生募集中です

国際協力に興味がある人、日本の課題が気になる人。PHD 協会の国内研修生として、海外からの研修生とともに学び、気づきを共有しませんか？ 今年はまだ 2 名を継続募集しています。来年 3 月末までの間で、週 1 日からでも大丈夫です。HP (<http://www.phd-kobe.org/internbosyu.html>) に詳細を掲載しています。ご不明な点は、お電話やメールで、お気軽にお問い合わせください。ゾンさん、カンチさん、サンティダさんも待っています！

◆寄贈願い

扇風機、石油ファンヒーター、ホットプレートをご寄贈いただける方を探しております。もしご家庭にご不要なモノがあればご一報いただくと助かります。

◆NGO 相談員平成 27 年度受託

国際協力分野で経験と実績をもつ日本の NGO が外務省の委嘱で「NGO 相談員」となり、NGO の国際協力活動、NGO の設立、組織の管理・運営など、市民や NGO 関係者からの質問・照会に答える事業を平成 27 年度も受託しました。



◆平成 26 年度 NGO 事業補助金報告

昨年度に引き続き外務省国際協力局民間援助連携室が実施する NGO 事業補助金を当会の研修事業に対して交付していただき、無事に事業を終えることができましたので、ここに報告させていただきます。

外務省NGO相談員

国際協力エッセイコンテスト 2015

「共に生きる」というテーマでの
あなたの考えや体験を
エッセイにして伝えてみませんか？

本コンテストは、
多様な今を生き、次世代を担う大学生を対象に、
違いを受け止め、共生とは何か
を考えることを目的として実施しています。

- **募集期間** 8月1日～10月30日
- **募集テーマ** 「共に生きる社会をつくるために、私たちができること」
- **対象** 大学生
- **応募規定** 形式自由、1600字以内。エッセイに学校名、氏名、学年、題名を明記ください。
- **最優秀賞** インドネシアもしくはネパールスタディツアーの往復航空券（2016年3月中旬実施予定）
- **ご応募・お問い合わせ先** 公益財団法人PHD協会
「NGO相談員エッセイコンテスト2015」係

※詳しくは当会ホームページをご覧ください。
<http://www.phd-kobe.org/>



〇月×日のPHD協会

「今春に起こった変化。公私問わず」

職員 今里 庭の緑を増やした。まずスコップで耕すこと2時間。爽快。が、気づけばマメが潰れ血だらけ。家族はヤワイと苦笑い。農家への道は遠い。

職員 芳田 会報のカラー化。突然の変更にあタフタ。色使いに悩み、気が付けば外が真っ暗。センスが問われる大きな変化。出来上がりはいかが？

職員 井上 特になし。ただ事務所引越にに伴い、座席での風通りがよくなる。気持ちいい反面、春風で書類が舞い上がるのが悩み。嬉しいけど。

職員 坂西 職場全体での扶養家族の増。職員4名で扶養家族7名。支出増は痛い。しかし「寿退社しないですむNGO」にまた一步前進。嬉しい。

以上、汗かきの順

ネパール復興支援募金にご協力ください

これからも研修生たちが暮らす村を中心に、暮らしの再建に向けて支援を続けていきます。これまでも多くの方々にご協力いただきておりますが、今後ともご支援のほど、よろしくお願ひいたします。

- 通信欄に「ネパール」とご記入ください。
- 寄付額の最大15%を諸経費として活用させていただきます。ご了承ください。
- 当会HPより、Paypalのシステムを利用したクレジット決済もご利用いただけます。

ゆうちょ銀行

振替口座：01110-6-29688
口座名：公益財団法人PHD協会

三井住友銀行

支店名：神戸営業部
口座：普通
口座番号：3210568
口座名：公益財団法人PHD協会

年末年始のタイスタディツアーのご案内

12月23日～1月2日

カレンの人たちの村でホームステイ。

手織り布を作る女性グループとの交流。

そして、たき火にあたりながら
元研修生たちとゆっくり語り合いませんか？

私たちが織った布を
見に来てくださいね！

外貨コイン・使用済み切手を集めています。
帰国後の研修生の応援に活用します！

昨年度、皆様からいただいた外貨コインと使用済み切手は、約14万円になりました。この14万円は、帰国した研修生たちの活動資金＝PHD基金として積み立てました。

このPHD基金を初めて適用したのは、ミャンマーのタダインシェ村でした。モーマさん（2013年度）たちが村に建てた図書館、そこにトイレを建設するために活用させていただきました。引き続き、皆様のご協力をお願いいたします。

未使用切手、書き損じハガキも受け付けております！

編集協力：桃骨